

書評

山口尚著

『哲学トレーニングブック——考えることが自由に至るために』

(平凡社、2020年)

三浦 隆宏

評者は著者とは面識がない。専門分野も異なる（評者が倫理学なのに対し、著者は形而上学である）。最初に白状すると、『武器になる哲学』（KADOKAWA）等の著者・山口周氏と（巷で話題の『独学大全』の帯文を書店で目にしたときに）一瞬混同したぐらいである。帯に推薦文を寄せていたのは「しゅう」氏であって、「しょう」氏ではない。

本書の書評を引き受けてから、著者の（noteのアップロード通知用だという）Twitterをフォローしてみた。すると連日のように長短さまざまなテキストがnoteに記されていることがわかった。まだSNSが存在しない20年以上も前に、内田樹氏が自身のホームページを開設して、「あらゆるジャンルにわたって思いつくまま書きに書いた」という行為をまさに彷彿とさせる。『暇と退屈の倫理学』（朝日出版社）で國分功一郎氏を世に送り出したことでも知られる名うでの編集者から、「noteの文章をまとめて本にしないか」という依頼が届いたという本書の成り立ちのエピソード（10頁）も、内田氏の単著デビューと同じである（もっとも著者の山口は、本書の刊行時点ですでに2冊の単著を公刊しているが）。

人文社会系の研究者は、博士号を取得して数年が経つと、日々の勉強の成果を発表する場を失いがちである。学会誌に論文を投稿するのもいつしか億劫となり、せいぜい（専任・非常勤を問わず）勤務先の紀要で論文を年に一本ほど発表するのが研究者としての矜持の一つとなってゆく。評者自身がそうである。その点で、本書は若い研究者らに希望を与えるのではないか。いまや発表の場は、学会誌や紀要ばかりではない。Twitterでの眩きが本になるのは、千葉雅也氏のような既に著名な人物に限られるだろうが、noteというツールを使えば、日々の思いや勉強の成果などを自由に公

開でき、もしテキストが面白ければ、仮に無名であったとしても、編集者から声がかかるかもしれないのだから（日本実業出版社から『誰も教えてくれなかった「死」の哲学入門』を刊行した内藤理恵子氏が時をおかずに出版した『正しい答えのない世界を生きるための「死」の文学入門』も、版元のnoteでの連載が元になっている）。

まえがきとあとがきを除くと計38本のテキストから成る本書は、その7割近くをさまざまな哲学書の読書ノートが占める。ジャンルは、山口が専門とする心の哲学や自由意志論を中心としつつも、中島義道やデリダ、永井均、岸政彦といった書き手にも及ぶ。ゆえに一般の読者は、本書を哲学ガイドブックとして読むことができるし（じっさい、形而上学や心の哲学、自由意志論に疎い評者はそのようにして読んだ）、著者と読書傾向が似ている読者であれば、彼の読み解き方から多くのことが学べるはずだ。山口がなぜこれほど多くの著作を乱読するのか、その理由の一端は、第五章の「哲学の退屈さについて」に記されている。

とはいえ、本書をより魅力的なものにしているのは、（専門として宗教哲学も掲げているのでとくに不思議なわけでもないのだが）、「科学者になることを夢見て理学部に入学した」（74頁）山口が、専門を哲学へと変更する動機について綴った「実存的な苦悩と哲学」や（同じ第三章に配された）彼が哲学をまなび始めた1998年からの日々が自伝的に記された二篇のエッセイであろう。いまはどうなのかわからないが（とはいえ「直近では」（69頁）という語もあるので、基本的には変わっていないのだろうか）、百万遍に生息する若き哲学徒たちがいかなる先生らのもとで、またどのような仲間らとともに哲学修行をしていたか／いるのかが窺える、郷愁を誘う佳品である。

本書の掉尾を飾る「私の「分析哲学」についてのノート」によると、心を踊らすことを重んじる山口は、評者から見るとかなり移り気が激しい人ようだ。分析哲学から離れ、表現の幅を広げた彼が、今後どのような著作を「実存を賭けて」（451頁）世に問うてゆくのか、友人のひとりと構想を温めているという『実存的苦悩の哲学』の刊行とともに楽しみに待ちたい。